

第1章 津山市の概要

01 自然について

(1) 位置

津山市は、北緯 35 度 0 分～ 35 度 18 分、東経 133 度 56 分～ 134 度 10 分に位置する（図 1 参照）。日本海と瀬戸内海に挟まれた中国地方の東部、両海岸線からはほぼ中央付近にある。現在の市域は、平成 17（2005）年の津山市、加茂町、阿波村、勝北町、久米町との合併によるもので、中国山地脊梁部の南側から吉備高原の北縁までの約 506km² の南北に伸びた市域となっている。北は鳥取県鳥取市と接し、西は岡山県鏡野町・真庭市、東は鳥取県智頭町および岡山県奈義町・勝央町、南は岡山県美咲町と隣接する。県庁所在地である岡山県岡山市からは、直線距離で約 46km 離れているが、国道 53 号、JR 津山線等で容易に行き来することができる。また、中国自動車道により、京阪神と九州を結ぶ動脈の中継点となっている。さらに姫路と出雲地方を結ぶ出雲街道の通過地であり、国道 179 号、JR 姫新線で姫路方面にアクセスすることができる。

(2) 地形

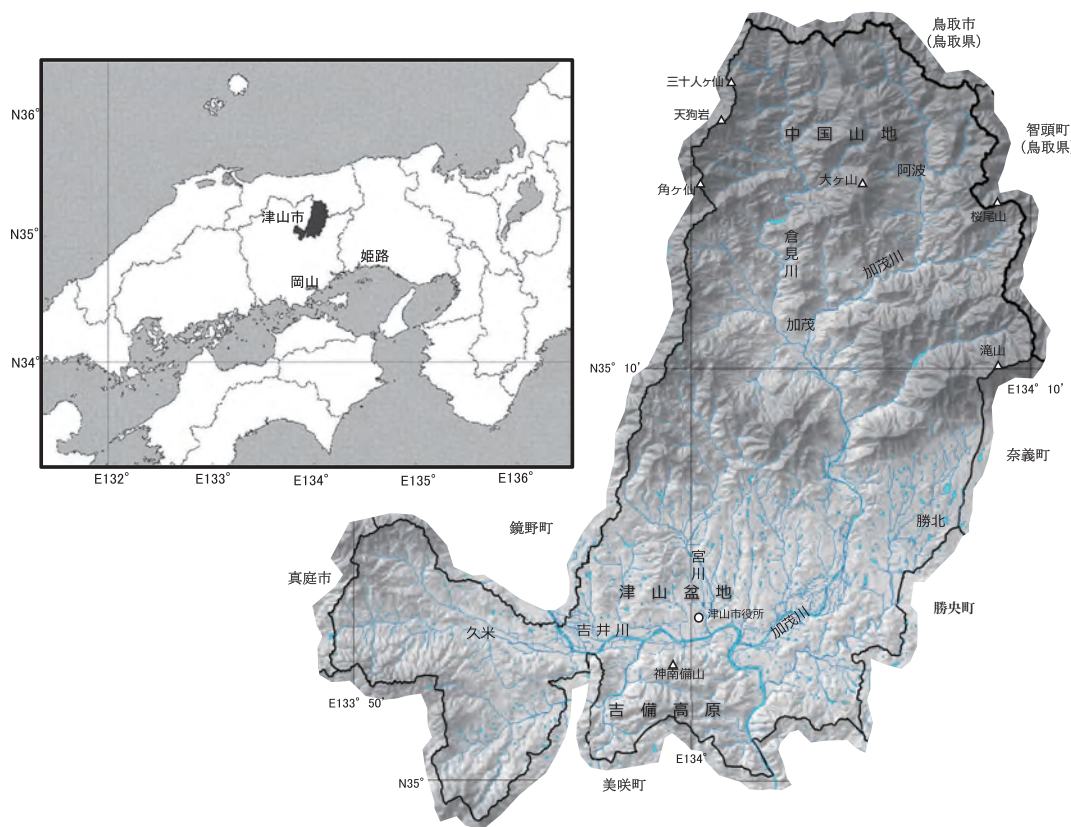


図 1 津山市の位置と地形

津山市の地形を図1に印影図で示した。この地域の地形は、大まかに北部の中国山地、南部の津山盆地、南縁の吉備高原に区分され、中国山地と津山盆地を吉井川とその支流の加茂川、宮川等が流れる。

市域内での最高標高は、国土地理院地図によれば、鏡野町との境界にある天狗岩と、中国山地南部那岐山系の滝山でいずれも1,196.5mとなっている。その他にも角ヶ仙(1,152.5m)や三十人ヶ仙(1,171.5m)、桜尾山(956.3m)、大ヶ山(989.7m)等、中国山地脊梁部から津山盆地の北限の那岐山系付近までの広い範囲に標高1,000m前後の山が連なっており、その間を加茂川が流下して、この山塊を浸食し谷地を形成している。倉見川と加茂川が合流する加茂町市街地付近では、標高約220mまで山地の開削が進み小盆地を形成している。

津山盆地は、鏡野町側から流下してくる吉井川と、市内北部から流れ来た加茂川が合流するあたりに形成された標高約75m～200mの低平地である。盆地北部と中国山地との境には、両地形を区分する那岐山断層帯の存在が推定されていて、活断層⁽²⁾の可能性が指摘されている。また、南部の吉備高原との境界付近にも断層地形が認められるが、こちらは開削された古い断層である可能性がある。盆地内の中央から東部にかけての紫保井から草加部にかけての地域には比高⁽³⁾50m前後で南北に列をなしながら南に向かって徐々に標高を下げている丘陵地が見られる。この丘陵地は半固結の堆積岩より構成されているため、小規模な地すべり等が多発して(図2参照)、複雑に入り組んだ谷地形を呈している。

市の南に座している神南備山(標高355.9m)から佐良山付近は、岡山県から広島県にかけての広い範囲に展開する吉備高原の北縁部に位置し、標高500m以下の小山地となっている。吉備高原は隆起した数段の浸食平坦面⁽⁴⁾から構成されるが、この付近は標高300m～450mの世羅台地⁽⁵⁾面に対比される。南に隣接する美咲町から流下する皿川や、地域の東部を流れる吉井川の本流がこの平坦面を標高400m前後開析している。

旧加茂町の花崗岩地帯では、かつて鉄穴流しによる砂鉄の採集が盛んに行われた。このため花崗岩を切り崩したことによって生じた人工的な平坦地や急崖、残丘などが現在も山地部に点在する(図3参照)。また、大量の土砂が流されたことにより、下流の谷沿いに砂礫が堆積して谷を埋め、山間部にもかかわらず広い平地が出現していることがある。さらに、沈砂池の跡が湿地となっている場所も見られる等、鉄穴流しによる人工改変地形が各所に存在する。

(2) 第四紀後半に変位したことが認められる断層。

(3) ある地点の盛土やがけ等の高さを近くの平らなところとの差であらわしたもの。

(4) 浸食作用や削剥作用によって形成された平坦な地形面。

(5) 広島県のほぼ中央に位置する世羅町付近に典型的にみられる平坦地形。吉備高原の一角を占める。



図2 岡山県の農地地すべり地の分布 津山盆地の丘陵部に集中して分布する。
(岡山県 HP : <http://www.pref.okayama.jp/page/detail-88656.html>)



図3 津山市加茂町宇野の鉄穴流し跡(残丘)

(3) 地質

図4に津山市の地質図を示す。この地域に分布する地質は、古生代後期の堆積岩類とこれら

が変成した変成岩⁽⁶⁾類(図4の分類A)、中生代初頭の堆積岩類(図4の分類B)、中生代白亜紀後期の火山岩類(図4の分類C)と、これらを割って貫入する中生代後期から新生代早期にかけての花崗岩を中心とした深成岩類(図4の分類D)、さらに、中国山地脊梁部や那岐山系の第三紀火山岩類(図4の分類E)、津山盆地の丘陵地域を作る新生代中新世の堆積岩類(図4の分類F)、これらを覆う段丘堆積物⁽⁷⁾や河川成の沖積層⁽⁸⁾等がある。

中国山地の南、山形仙の西稜から上横野地区にかけて、三郡変成帯⁽⁹⁾に属する低温高压型の結晶片岩⁽¹⁰⁾化した変成岩類が見られる。泥質片岩⁽¹¹⁾が大部分であるが、砂質片岩⁽¹²⁾や珪質片岩⁽¹³⁾もレンズ状に時折挟在する。また、市の南東部には弱～未変成のスレート、もしくは泥質岩類があり、これらは古生代ペルム紀の付加体である舞鶴層群⁽¹⁴⁾に対比される。

市内南部地域には、非変成の固結した砂岩、頁岩⁽¹⁵⁾、砂岩・泥岩互層等が分布しているが、産出化石から、成羽層群⁽¹⁶⁾に対比される中生代三畳紀の地層が分布している。上横野北方には中生代中期のジュラ紀の砂岩、頁岩互層が分布している。

神南備山付近の吉備高原地域には、中生代白亜紀後期の火山岩類が広く分布している。これらは主に数 cm 程度の本質・異質礫を含む流紋岩質凝灰岩⁽¹⁷⁾で、カルデラ⁽¹⁸⁾を形成したような大規模火山活動によって形成された。火山活動の休止期に堆積した堆積岩類もその中に挟まれていることがある。

旧加茂町より北の山地の大部分には、白亜紀後期から古第三紀初頭にかけて形成された花崗岩類が露出している。主要鉱物の粒径が数 mm になる粗粒な岩相と、1 mm 程度の中粒な岩相

(6) 既存の岩石が熱や圧力等による変成作用を受けてできた岩石。

(7) 大きな河川の流域に見られる河成段丘を構成する、堆積物で大部分が礫層である。一般に、礫の大きさや形は場所によって変化する。表層部では風化して軟らかくなっていることがあり、クサリ礫とよばれている。

(8) 約2万年前の最終氷期最盛期以降に堆積した地層のこと。

(9) 九州北部から中国地方東部にかけて分布する、高压型の変成岩によって特徴づけられる地帯。名は福岡市東部の三郡山による。

(10) 変成岩の一種。広域変成作用により地下深部で剪断応力を受けて再結晶したため、雲母のような板状の鉱物や角閃石のような柱状の鉱物が方向性をもって配列しているため、平行な割れ目が発達しがれやすい。

(11) もともと堆積岩の泥岩であったものが、変成したものの。

(12) もともと堆積岩の砂岩であったものが、変成したものの。

(13) 二酸化珪素(石英)に富む変成岩をさす。日本では、変成を受ける前はチャートであった場合が多い。

(14) 京都府北部の舞鶴市付近から西南西に延びて広島県付近に至る幅約20km、長さ約200kmの地帯で、おもに古生代ペルム紀の地層。

(15) シルトや粘土を主体とする泥岩のうち、剥離面を有している岩石。

(16) 高梁市成羽付近に分布する泥岩・砂岩を主とする中生代三畳紀の地層。

(17) 火山から噴出された火山灰が地上や水中に堆積してできた岩石。

(18) 巨大噴火により陥没して形成された数 km から数十 km に及ぶ凹地地形。

1, 4, 170	分類G：第四紀の段丘層・沖積層
8	分類F：新第三紀中新世の堆積岩類
91, 102, 107, 118	分類E：第三紀の火山岩類
81, 129, 128, 144	分類D：白亜紀後期の深成岩類
93, 109	分類C：中生代白亜紀後期の火山岩類
23, 24	分類B：中生代初頭の堆積岩類
26, 60, 75, 157, 158	分類A：古生代後期の堆積岩・変成岩類
番号ごとの凡例は“シームレス地質図の全国統一詳細凡例(https://gbank.gsj.jp/seamless/legend_shosai.html)”を参照	

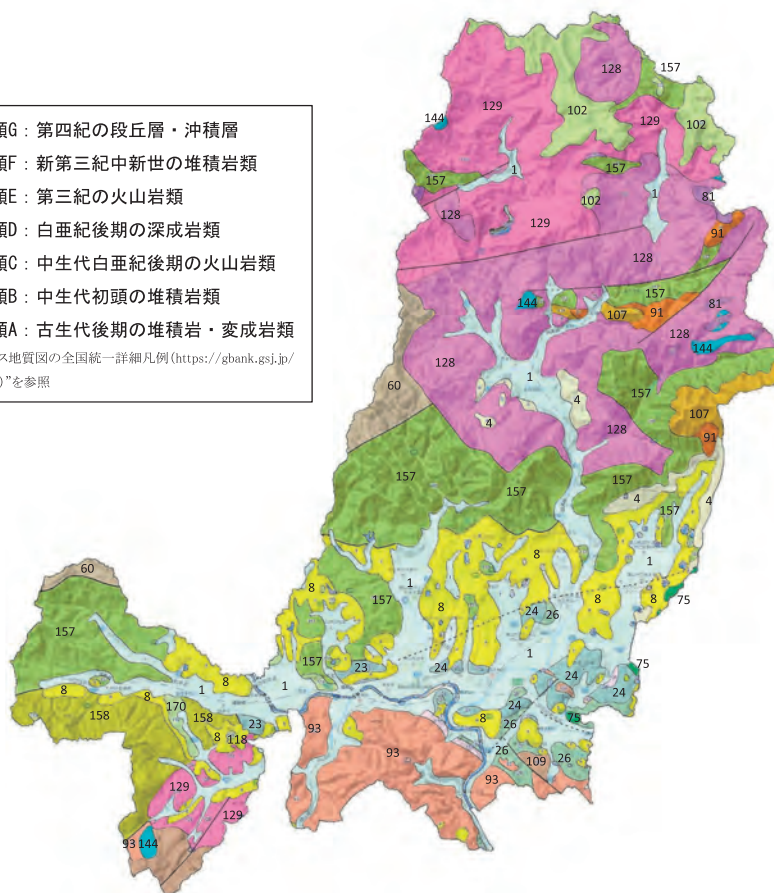


図4 津山市の地質図（シームレス地質図：産業技術総合研究所を改編）

がある。カリ長石がやや褐色を帯びており、有色鉱物は主に黒雲母からなる。磁鉄鉱系列の花崗岩で、かつては鉄穴流しにより砂鉄（磁鉄鉱）が採取された。また、これらの中に閃緑岩⁽¹⁹⁾等の塩基性深成岩類が点在している。

那岐山から滝山にかけての山塊には古第三紀の火山岩類が分布している。また、大ヶ山から黒岩高原にかけての山々の頂上には極めて平坦な地形があり、玄武岩や安山岩の溶岩や火山砕屑物⁽²⁰⁾等が上記花崗岩を覆っている。これらは古第三紀の火山岩類で、溶岩台地が残存したものである。阿波の布滝は、玄武岩溶岩に形成された柱状節理⁽²¹⁾の上にできた滝である。

津山盆地の紫保井から草加部にかけてと、院庄付近の丘陵地には、半固結状態の砂岩、泥岩、もしくはこれらの互層が分布している。化石年代から新生代中新世の地層とされ、勝田層群と命名されている。比較的温暖な気候下の海成層で、津山市に隣接する奈義町の本層から示準化

(19) 深成岩の一種。数 mm 程度の斜長石、角閃石からなり、黒雲母や輝石、石英、正長石を含むことがある。

(20) 火山から噴出された固形物のうち、溶岩以外のものの総称。火砕物、テフラともいう。

(21) 岩盤中を柱が密集したような形態に発達する割れ目（節理）で、高温の岩体が冷却するときに収縮してできる。

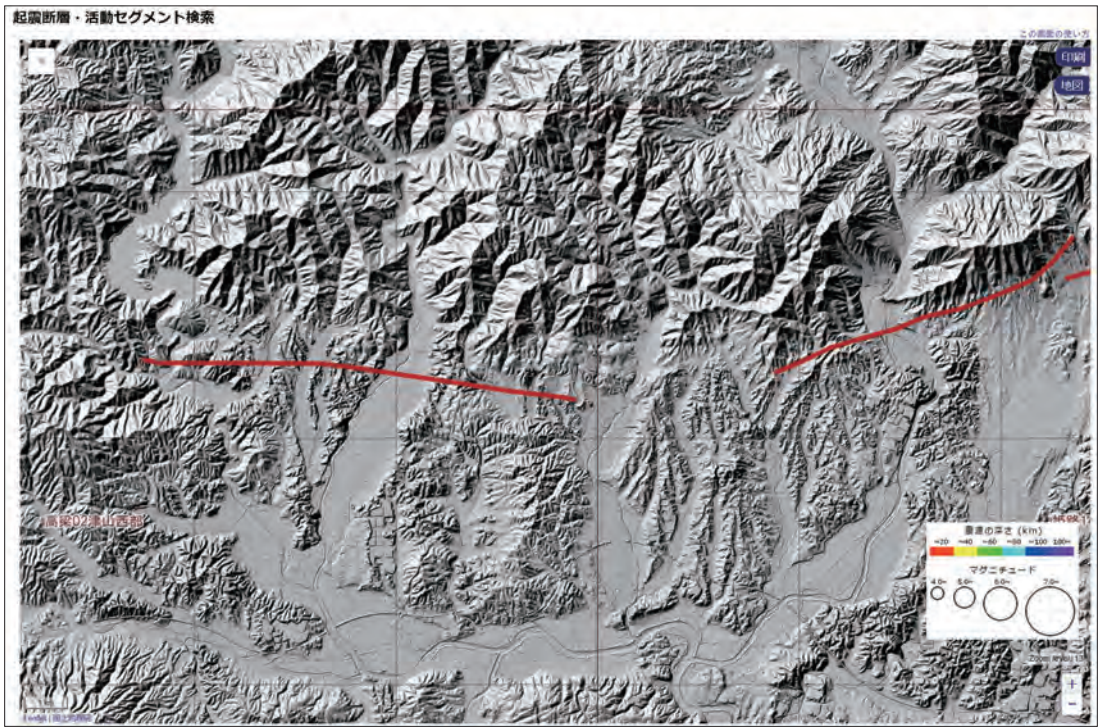


図5 那岐山起震断層帯（左のライン）津山セグメント（右のライン）那岐山セグメントの一部（産業技術総合研究所 活断層データベースより）

石のビカリア⁽²²⁾が多産する。また、津山市内の吉井川で河床からはヒゲクジラ類の化石が発見されている他、上田邑の工事現場からは絶滅した海棲哺乳類の一種であるパレオパラドキシアが当時の中学3年生の少年により発見された。

中国山地と津山盆地の地形境界には那岐山断層帯があり、東田辺から山方にかけての部分には、長さ10kmにわたる津山セグメントが通過している（図5）。この断層は逆断層として記載され

(22) 日本各地の新生代の始新統から中新統にかけて化石が発見され、熱帯や亜熱帯のマングローブ林を伴う汽水から海水域に生息した肉食の巻貝の一種。新第三紀中新世の示準化石である。

地質年表

開始年代 (年前)	1万1700年	258万年	533万3000年	2303万年	3390万年	5600万年	6600万年	
累代	顕生代							
代	新生代							
紀	第四紀		新第三紀			古第三紀		
世	完新世	更新世	鮮新世	中新世	漸新世	始新世	暁新世	

開始年代 (年前)	1億4500万年	2億130万年	2億5217万年	2億9890万年	3億5890万年	4億1920万年	4億4340万年	4億8540万年	5億4100万年
累代	顕生代								
代	中生代				古生代				
紀	白亜紀	ジュラ紀	三疊紀	ペルム紀	石炭紀	デボン紀	シルル紀	オルドビス紀	カンブリア紀
世									

ており、その北側が隆起したが、第四紀更新世後期以降の活動は現在のところ知られていない。

津山盆地の丘陵地の標高 150m ～ 200m の頂部には、円礫を主体とした未固結の礫層ならびに平坦面が残されている。これらは盆地を流れる河川によって形成された河岸段丘によるものと考えられている。また、現在の河川に沿って礫や砂などの碎屑物が堆積し、沖積層を作っている。

(4) 気象

津山市のうち、おおむね加茂地域より南側は中国山地の南麓部にあたり瀬戸内型気候区⁽²³⁾に属する。津山市林田の気象庁アメダスの平年値（昭和 56（1981）年から平成 22（2010）年）は、年間降水量は 1,415.8mm、年平均気温は 13.7℃であり、瀬戸内式気候区の典型とされる岡山市と比べると降水量は 309.9mm 多く、平均気温は 2.5℃低い（表 1）。

図 6 の月別の降水量の推移を見ると、いずれも夏場にピークを迎える山形を示す。しかし、降水量については 7 月に 247.3mm の最大値となるが、8 月になると 106.5mm まで一旦落ち込んだ後、9 月に 168.5mm まで戻る。その後冬に向けて徐々に降水量は減少し、最少降水量の 12 月は 46.3mm となる。12 月から 2 月にかけては多少降雪があるが例年の積雪量は多くない。しかし、年によっては大雪となることもあり、平成 15（2003）年 12 月 20 日に日最大の降雪の深さが 40cm を記録した。

月別の平年気温（図 6）は、8 月に 26℃の最大値となり、1 月に 2.2℃の最小値となる山形を示す。日最高気温は、平成 30（2018）年 8 月 5 日に 38.4℃を記録したほか、気象庁の統計期間における日最高気温の第 10 位までが 37℃を超えている。逆に、日最低気温のランキングでは、昭和 38（1963）年 1 月 24 日に -12.8℃を観測している。しかし、平年値算出期間における日最高気温と最低気温はそれぞれ、31.8℃（8 月）と -1.7℃であることから通常は比較的温暖で冬の寒さも夏の暑さもそれほど厳しくはない日が多いが、気象条件によっては盆地特有の急激な変化に見舞われることがある。

表 1 津山市と岡山市の気象データ（平年値昭和 56（1981）年～平成 22（2010）年）の比較

	年間降水量 (mm)	年平均気温 (℃)	相対湿度 (%)	風向・風速 (m/s)
津山市	1415.8	13.7	76	西・1.6
岡山市	1105.9	16.2	67	東北東・3.1

(23) 瀬戸内海沿岸地域に特有の気候。北に中国山地、南に四国山地があるために乾燥した気候となり、1 年を通じて晴天が多く、降水量が少ない。

風向・風速の平年値は、西・1.6m/s であり通常は弱い西風がある地域である。しかし、台風時に極めて強い風が吹くことがあり、観測史上最大の瞬間風速は、54m/s で平成 16 (2004) 年 10 月 20 日に記録された。これは台風 23 号によるものであり、この年の風倒木被害は甚大であった。津山盆地では、台風等により北寄りの強い風が吹くと、那岐山北麓の鳥取県千代川の渓谷で収束され強化した風が強くなり、那岐山から吹きおろしていわゆる広戸風となる。広戸風は 9 月・10 月に発生することが多いので、農作物等への影響が心配される風である。また、地元では那岐山系に風まくらと呼ばれる雲が発生すると広戸風が発生するという観天望気法⁽²⁴⁾ が言い伝えられている。

津山市域内の中国山地の気象データについては、恩原高原のアメダス雨量データを参考値として示す(図 7)。中国山地脊梁部では、年間降水量の平年値は 2,353.5mm であり、津山盆地と比べると 937.7mm 多い。これは 10 月から 3 月までの冬期の降水量が多いことによるもので、このために降水量グラフは 7 月に最大値を持つものの、年間を通じてほぼ一様に雨が降っている形になっている。このように、中国山地脊梁部は日本海型(1C 北陸・山陰型)気候区の特徴を示している。

美咲町久木における吉井川の流量観測では、平成 5 (1993) 年から平成 29 (2017) 年の年間総流量は、 $782.86 \times 10^6 \text{m}^3/\text{年}$ (1994 年) ～ $1,847.38 \times 10^6 \text{m}^3/\text{年}$ (2006 年) で、観測期間の平均値は、 $1,345.45 \times 10^6 \text{m}^3/\text{年}$ である。平成 29 (2017) 年の月別流量は、12 月が最も少なく約 $19.5 \text{m}^3/\text{s}$ であり、10 月が最も流量が多く $114.2 \text{m}^3/\text{s}$ であった。中国山地部では年間を通じて月降水量が 150mm 以上あり、平成 16 (2004) 年に竣工された苫田ダムによって流量

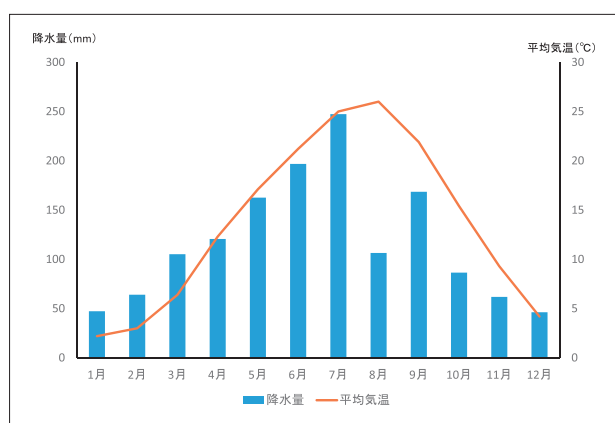


図6 津山市の気象 月ごとの降水量と平均気温の平年値 (気象庁)

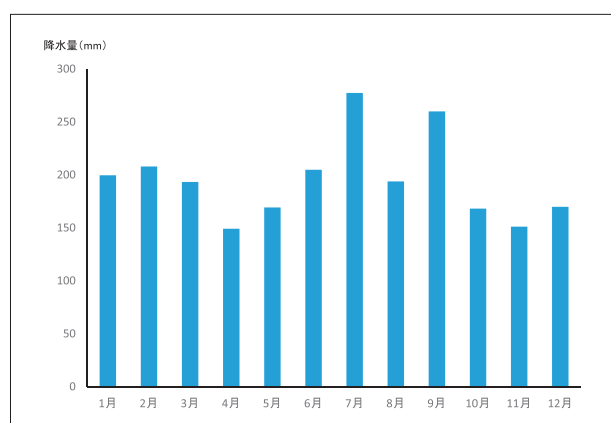


図7 恩原アメダスの月ごとの降水量の平年値 (気象庁)

(24) 自然現象や生物の行動の様子等から天気の変化を予測すること。

が調整されているものの、瀬戸内型気候特有の少雨傾向の津山盆地内を流れる吉井川は、年間を通じて多くの流量がある。

(5) 動植物

津山市は総面積 506.33km² のうち、森林面積は 351.61km² (平成 29 年岡山県統計年報) となっており、森林の割合が約 7 割に達する。このうち、人工林が 230.18km² であり、森林面積の約 65% を占めている。多くは、スギ・ヒノキの植林で、このうちヒノキは美作桧としてブランド化されている。相対的に津山市域では天然林は多くないが、残存する部位では標高等の自然条件によって規制された植生を示し、中国山地脊梁部の高地には、ブナ・ミズナラ群落、クリーミズナラ群落等の落葉広葉樹林⁽²⁵⁾ が分布する(図 8 参照)。黒岩高原や大ヶ山の山頂の平坦地にはススキやササからなる原野が広がっている。脊梁山地から下り旧加茂町中心部に近い山地では、スギ・ヒノキ植林の間にアカマツ林が分布し、矢筈山の中腹にはコナラ群落が見られる。津山盆地の南の神南備山やその周辺の吉備高原地域は中国山地部に比べて植林地は少なくなり、コナラ群落とアカマツ群落がモザイク状に分布している。

津山市に特化して記載された野生動物の種類や分布についての詳細な情報が見当たらないため、周辺地域を含めた地域も含めて、岡山県野生生物目録 2019 において公表されているリストを適用する。この野生生物目録には、岡山県北部地域(津山市においては、旧加茂と旧阿波、



図 8 津山市阿波の大ヶ山スキー場から見た東(桜尾山)方向の中国山地
スギ・ヒノキの植林が大勢を占める中、広葉樹林が存在する。

(25) 冬季になると全ての葉を落とす広葉樹の森林。

旧勝北が該当) に生息する 38 種がリストアップされている。このうちコウベモグラ、キクガシラコウモリ、ニホンザル、アカネズミ、ヒメネズミ、ドブネズミ (外来種)、クマネズミ (外来種)、ヌートリア (特定外来種)、タヌキ、ホンドキツネ、アナグマ、ニホンイノシシ、ニホンジカは生息状況が“普通”のランクとして記載されているので津山市域の山間部においても生息が予想される。これ以外の 25 種については生息状況が“少量”となっているので既に生息していない種が入っている可能性がある。また、リスト化された種の中で県北にかつていたとされるニホンオオカミとニホンカワウソは“絶滅”となっている。津山市域の中で旧津山と久米は岡山県中部地域とされているが、生息状況が普通ランクになっている種としては、コウベモグラ、ニホンザル、カヤネズミ、アカネズミ、ドブネズミ (外来種)、クマネズミ (外来種)、ヌートリア (特定外来種)、タヌキ、ホンドキツネ、チョウセンイタチ、アナグマ、ニホンイノシシ、ニホンジカが掲げられており、県北地域と生息種数に大きな違いはない。生息状況が“少量”にランクされているものにはカワネズミなど 21 種がある。

鳥類については生息状況が“普通”にランクされる種が北部地域で 51 種、中部地域で 48 種ある。この中で、北部地域に生息しているが南部地域には生息状況が“少量”になっているものとして、アオバト、アカゲラ、ヒガラ、ミソサザイ、カワガラス、ソウシチョウ (特定外来種) があり、逆に北部地域では生息状況が“少量”であるが南部地域では生息状況が“普通”にランクされるものとしてオカヨシガモ、キンクロハジロ、チュウダイサギがあった。爬虫類については、北部地域と南部地域で生息種に大きな違いはないが、ミシシippアカミミガメ (外来種) は北部地域での生息は無いとされている。また、ニホンヤモリは北部地域では生息状況が“少量”なのに対し中部地域では生息状況が“普通”となっている。

両生類では、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に選定されている小型サンショウウオが北部地域・中部地域で生息状況が“少量”となっている。特別天然記念物にも指定されるオオサンショウウオは北部地域で生息状況が“少量”となっているが、津山地域での生息状況については確認が必要である。また、カエルについても岡山県の条例で保護が必要とされているダゴガエルは北部地域の生息状況が“普通”となっているが、津山市域の状況について確認する必要がある。

魚類についても北部地域と中部地域で生息種数に大差はないが、北部地域において生息状況が“普通”なものとして、スナヤツメ、アブラハヤ、ウグイ、アマゴが上がっている。

(6) 自然と共生してきた津山市

津山市の人口は 103,746 人 (平成 27 (2015) 年国勢調査) で、岡山県内では第 3 位の人口を

有するが、多くは津山盆地に集中するため、津山市域の大部分を占める中国山地や吉備高原のエリアには、植物や昆虫と触れ合うことができる自然が比較的多く残されている。特に中国山地部には阿波森林公園や加茂の 22 世紀の森等、森林や山の風景・自然を生かした公園が設置され、市民や岡山県民の憩いの場となっている。また、黒木キャンプ場等よく整備されたキャンプ場も中国山地部には点在する。津山を代表する観光地である津山城跡では桜の植樹と管理が行われ、春の花見のシーズンには多くの観光客が訪れる。17 世紀に津山藩 2 代藩主森長継が築造した大名庭園の旧津山藩別邸庭園（衆樂園）で見られる植物や風景は、津山の自然や気候を象徴する場所となっている。

古くより津山は、中国山地の林産物などを瀬戸内海へと吉井川を通じて運び出すための交通の拠点であり、美作の行政の中心地でもあった。そのような地にならしめたのは、津山盆地という平坦地や、水量豊富な吉井川、生活しやすい気候、そしてこれらの素因によって育まれた豊かな自然の存在があったからこそであり、自然に囲まれ、身近に自然に接することができる。

02 社会的状況

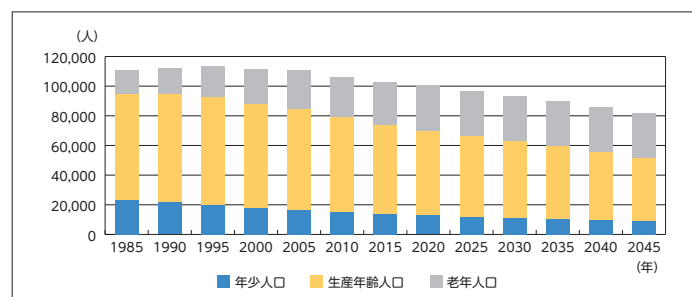
（1）人口動態

津山市の総人口は、平成 7（1995）年には 113,617 人であるが、平成 27（2015）年には 103,746 人となり、この 20 年間で 9,871 人減少し、減少率は、8.7%である。

平成 7（1995）年から平成 27（2015）年の年齢 3 区分別の人口では、年少人口は 19,685 人（構成比 17.3%）から 13,991 人（構成比 13.5%）へ、生産年齢人口は 72,770 人（構成比 64.0%）から 59,399 人（構成比 57.3%）と、人数、構成比とも下がっている。一方、老年人口は 21,145 人（構成比 18.6%）から 29,663（構成比 28.6%）と増加しており、少子高齢化が進行している。さらに、2045 年の推計値を見ると、総人口は 81,775 人、年少人口 9,326 人（構成比 11.4%）、生産年齢人口 42,433 人（構成比 51.9%）、老年人口 30,016 人（36.7%）と、さらに人口減少と少子高齢化が進むことが予測されている。

津山市の出生数は、平成 29（2017）年には 823 人と、平成 7（1995）年と比較すると 30% 減少している。一方で、死亡数は増加の傾向にあり、平成 29（2017）年には 1,301 人となっている。平成 17（2005）年以降は、死亡数が出生数を上回り、その差はさらに広がっている。

また、社会動態を見ると、転出が転入を上回る社会減が続いており、自然減とともに人口減少が今後加速化していくことが懸念される。



年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年
年少人口	23,472	21,516	19,685	17,713	16,618	15,146	13,991	12,748	11,642	10,918	10,274	9,810	9,326
	21.2%	19.1%	17.3%	15.9%	15.0%	14.2%	13.5%	12.7%	12.0%	11.7%	11.5%	11.5%	11.4%
生産年齢人口	71,481	72,987	72,770	69,958	68,048	63,561	59,399	56,833	54,288	52,020	49,393	45,435	42,433
	64.7%	64.9%	64.0%	62.7%	61.5%	59.5%	57.3%	56.6%	56.1%	55.9%	55.2%	53.1%	51.9%
老年人口	15,589	17,874	21,145	23,822	25,900	27,184	29,663	30,744	30,783	30,150	29,821	30,381	30,016
	14.1%	15.9%	18.6%	21.4%	23.4%	25.5%	28.6%	30.6%	31.8%	32.4%	33.3%	35.5%	36.7%
総人口	110,542	112,386	113,617	111,499	110,569	106,788	103,746	100,325	96,713	93,088	89,488	85,626	81,775

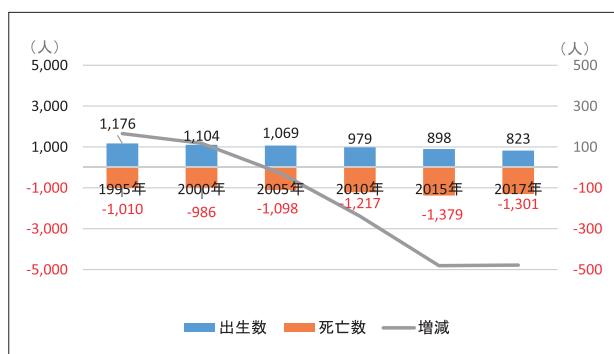
【出典】総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

【注記】2020年以降は「国立社会保障・人口問題研究所」のデータ（平成30年3月公表）に基づく推計値。

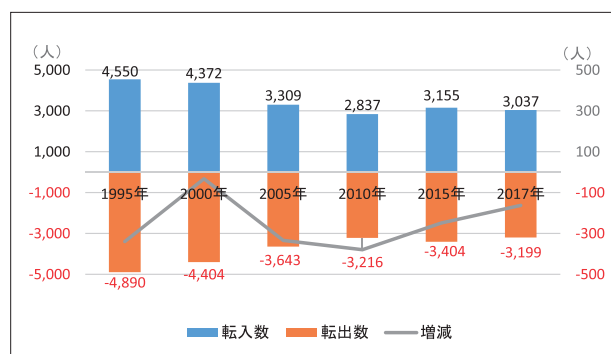
年齢3区分別人口の推移

今後、有形・無形の文化財を保存・継承していくにあたり、津山市では、人口の減少や少子高齢化が益々進んでいることから、世代を超えた保存・継承についても、次の時代の担い手がいつそう不足することが懸念される。

将来にわたる文化財の保存・継承にあたっては、市民による理解と幅広い担い手の育成・確保や保存・継承の手法を柔軟に検討することが望まれる。



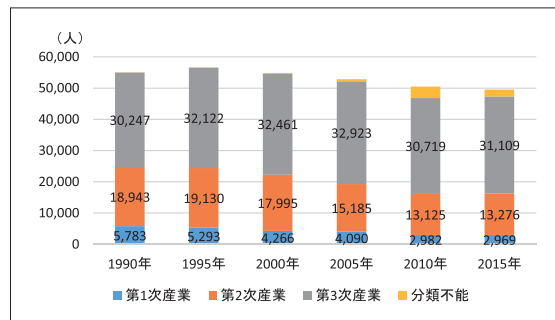
自然動態 (出生・死亡) の推移



社会動態 (転入・転出) の推移

(2) 産業

産業別就業者数では、平成27(2015)年では、全就業者数が49,533人で、第1次産業就業者数が2,969人(構成比6.0%)と、平成2(1990)年の5,783人(10.5%)から大きく減少している。第2次産業も、平成27(2015)年に13,276人(構成比26.8%)と減少しているが、第3次産業は31,109人(構成比62.8%)と増加の傾向にある。



産業別就業者数の推移

第1次産業のうち、農業就業者の平均年齢は平成27(2015)年には71.1歳となっており、農業就業者の高齢化率が79.3%と極めて高い状況である。また、経営耕作面積は平成17(2005)年には435,321aであるが、平成27(2015)年には370,274aと、約14.9%減少しており、世代を超えて継承してきた農地の維持や農業生産景観の保全が困難になることが予測される。

津山市の農業就業者の平均年齢及び高齢化率

	2005年	2010年	2015年
農業就業者平均年齢	65.9歳	70.1歳	71.1歳
農業就業者の高齢化率 (65歳以上の割合)	68.4%	75.5%	79.3%

【出典】農林水産省「農林業センサス」再編加工

津山市の農業経営体数及び経営耕作面積

	2005年	2010年	2015年
農業経営体数	4,826	4,136	3,410
経営耕作面積(a)	435,321	413,394	370,274

【出典】農林水産省「農林業センサス」再編加工

林業においては、経営体数が平成27(2015)年には283となり、平成17(2005)年の643と比較すると半数以下に減少しているが、平成27(2015)年の林作業請負収入は7億6,125万円と2倍以上に伸びている。古くから優良木材として知られる美作材の一大産地であり、森林景観の保全、林業から製材業等の技術の集積があり、産業と共に伝承する文化財として、保存・活用していくことが期待される。

津山市の林業経営体数及び林業作業請負収入

	2005 年	2010 年	2015 年
経営体数	643	424	283
林作業請負収入（総額）（万円）	35,925	78,475	76,125

【出典】農林水産省「農林業センサス」再編加工

津山市における産業構造を従業者数で見ると、卸売業・小売業の従事者が 11,633 人 (25.1%) と最も多くなっている。宿泊業・飲食サービス業も 3,967 人 (8.6%) が従事していることから、今後、歴史的な町並みをはじめ、文化財を活かした交流事業を通して、市民の意識向上と持続可能な文化財の保存・活用が期待される。

産業（大分類）別・規模（7 区分）別民営事業所数及び従業者数（平成 26（2014）年総数）

分 類	事業所数	従業者数
農業・林業・漁業	39	405
鉱業・採石業・砂利採取業	3	15
建設業	513	3,256
製造業	390	7,035
電気・ガス・熱供給・水道業	5	292
情報通信業	32	359
運輸業・郵便業	116	1,932
卸売業・小売業	1,449	11,633
金融業・保険業	99	1,106
不動産業・物品賃貸業	293	845
学術研究・専門技術サービス業	193	897
宿泊業・飲食サービス業	594	3,967
生活関連サービス業・娯楽業	471	1,616
教育・学習支援業	137	962
医療・福祉	406	8,103
複合サービス業	49	781
サービス業（他に分類されないもの）	387	3,177
合 計	5,176	46,381

【出典】「平成 30 年度津山市統計書」再編加工

また、17 世紀初頭の津山城築城に伴って美濃や津山周辺から多くの商人や職人が移り住んだことから、数々の伝統産業が育ち、紙漉き、鍛冶、酒造、菓子製造、織物等が現代に伝えられている。

和紙製造については既に後継者が育っており、作州絣についても技術者が認定されている。

一方で、後継者を確保できていない鍛冶などの伝統産業もあり、技術の保存・継承のためにも、今後の対策が求められる。

（注）この項の数値は「津山市統計書」による

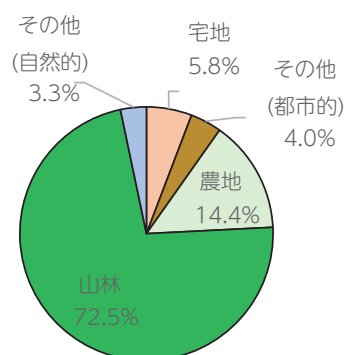
(3) 土地利用

岡山県の東北部に位置する津山市の面積は 506.33km² で、北は鳥取県、南は吉備高原に接している。北部の鳥取県境付近は中国山地の一角で標高 1,000m ～ 1,200m の傾斜地となっている。南部は「津山盆地」と呼ばれ、標高 100m ～ 200m の平坦地が広がっている。

平成 30 (2018) 年の土地利用現況を見ると、農地が 7,316.1ha (14.4%)、宅地が 2,948.1ha (5.8%)、山林 36,705.0ha (72.5%)、その他都市的土地利用 2,001.9ha (4.0%)、その他自然的土地利用 1,661.9ha (3.3%) となっており、山林が約 7 割を占めている。

本市の土地利用現況

津山市 (全域)		面積(ha)		割合
都市的土地利用	宅地	住宅用地	1,926.4	2,948.1 5.8%
		商業用地	367.5	
		工業用地	265.0	
		公益施設用地	389.2	
	その他都市的土地利用	道路用地	1,378.1	2,001.9 4.0%
		公共空地	231.7	
		その他の空地	303.0	
		その他	89.1	
土地自然的利用	農地		7,316.1	14.4%
	山林		36,705.0	72.5%
	その他自然的土地利用		1,661.9	3.3%
地区合計			50,633.0	100.0%

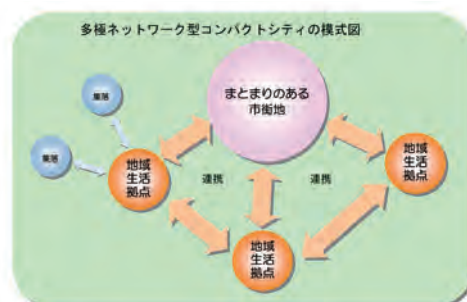


※その他の空地…未利用地、平面駐車場、資材置場、改変工事中の土地等その他…交通施設用地、農林業施設用地、その他公的施設用地
農地…田、畑
その他自然的土地利用…水面、その他自然地

資料：都市計画基礎調査（平成 30 年（2018）3 月）

『津山市都市計画マスタープラン』（令和 2（2020）年 3 月）では「暮らし続けたい活力と魅力あふれるまち つやま」をテーマとして、まとまりのある市街地と地域生活拠点とが有機的に連携した「多種ネットワーク型コンパクトシティ」を目指すこととしている。

今後とも、津山市の特性を保全・活用した土地利用とともに、文化財についても包括的な保存・活用の検討が望まれる。





【出典】「津山市都市計画マスタープラン（平成20年3月）」より

将来都市構造図

(4) 交通

津山市では、和銅6（713）年に美作国が設けられ、現在の津山市総社に国府が置かれ、奈良時代から江戸時代を通じて、各地域との交流が盛んになり、出雲と大和を結ぶ往来の要衝として発展してきた。

慶長9（1604）年に森忠政が津山城と城下町の建設に着手し、城下の整備が進むに伴って街道の整備が本格化し、出雲と姫路を結ぶ出雲街道をはじめ、岡山へ通じる備前道、鳥取道、倉

吉道が整備され、各地へ結ぶ道が整っていった。また、吉井川の舟運も開かれ、年貢米の運搬に重要な役割を果たし、人・情報・物資が行き交い、商業活動や文化の発展に大きな役割を果たした。

明治時代に入ると、明治 31 (1898) 年に中国鉄道の津山口～岡山間が開通し、その後昭和初期にかけて、新見と結ぶ作備線、鳥取へは因美線と、鉄道網が整備された。

昭和 50 (1975) 年には、中国自動車道の吹田～落合間が開通し、津山市の産業・経済に大きな影響をもたらした。

こうした歴史を経て、現在、道路では高規格幹線道路・中国自動車道が東西を走り、米子自動車道、岡山自動車道、さらに山陽自動車道へとつながり、広域的な交流を可能にしている。また、国道 53 号、179 号、181 号、429 号が主要な道路となっている。

鉄道においても、津山線、姫新線、因美線が、かつての街道に沿って敷設されており、交通の要衝として発展した津山市の歴史を今に受け継いでいる。



【出典】津山市統合型 GIS きらきらつやまっぶ
津山市周辺交通網

03 歴史的背景

(1) 先史

1) 旧石器時代

美作地域に人々が最初に現れたのは、今からおよそ 30,000 年前と言われている。この時期を含む時代は旧石器時代と呼ばれ、氷期と間氷期が繰り返された時代であった。主に石器を道具として使用していた。

美作地域のこの時代の遺跡は、真庭市の蒜山高原や鏡野町の恩原高原で多く確認されている。市内では、天神原遺跡や大開遺跡等の丘陵部に位置する遺跡でナイフ形の石器が出土している。

始良^{あい} Tn 火山灰⁽²⁶⁾ が降下 (約 29,000 年～ 26,000 年前) する前には、この頃の遺跡が中国山地の尾根に沿って、発見されていることから、中国山地には尾根筋を通る道があり、それが旧石器時代の幹線交通路であったと考えられている。始良 Tn 火山灰降下後は、遺跡の調査から瀬戸内と日本海を結ぶ南北交通路が川筋に沿って伸びていたことが確認されている。

2) 縄文時代

今から約 15,000 年前頃に縄文時代は始まった。この時期、気候が現在に近い状態になり、海水面が上昇をする等の大きな自然環境の変化があった。それとともに前時代とは生活様式も変わってきて、縄文時代の特徴である、土器の使用や定住が行われ始めた。また、狩猟技術の向上による食糧事情の改善により人口が増加したとされているのもこの時代の特徴である。

津山市内では、早期に属する大田西奥田^{おおだにしおくだ}遺跡において、床面を少し掘り下げた竪穴式の住居が確認されている。前期から中期にかけての遺跡は、対象範囲を美作地域に広げても遺跡数はわずかで、後期になると遺跡数は増加する。後期の堀坂星ヶ坪^{ほりさかほしがつぼ}遺跡の調査では、その立地からこれまでの狩猟採集に適した丘陵部等の生活から、平地に生活拠点が移っていることを確認しており、人々がある程度定住していたことを示している。

津山市の西隣に位置する鏡野町では、関東や北陸の特徴を持つ土器や、新潟産のヒスイで作られた勾玉が出土していることから、この時代、広範囲な人や物の交流があったことがうかがえる。

ただ、津山市を含む美作地域の縄文時代の遺跡数は多くなく、未解明な事柄が多いのが現状である。

3) 弥生時代

弥生時代は本格的な稲作の伝播をもって始まるとされ、主に稲作の定着が時代の指標となっている。年代については、現在諸説あるが、一般的には紀元前 5 世紀ころから 3 世紀初めまでである。

津山市を含む美作地域では、弥生時代前期になると遺跡数が激減していき、高橋谷^{たかはしだに}遺跡等いくつかの遺跡が確認されているのみであ



沼遺跡 (県史跡)

(26) 約 29,000 年前～ 26,000 年前に始良カルデラの巨大噴火で噴出した大量の火山灰で、九州から関東にかけての地域に分布する。地層の年代決定における鍵層の一つになっている。

る。中期中頃から後期になると遺跡数は急増する。中期以降の集落は、美作地域の盆地、河岸段丘上および緩やかな丘陵上に作られていき、弥生時代の研究史上著名な沼遺跡（県史跡）が出現し、天神原遺跡や沼京免遺跡では直径 10m 以上の大型竪穴住居をもつ集落や周りを濠で囲んだ環濠集落なども出現する。また、このころの土器は、山陰地方の土器に似たものが多くなることから、地域間の交流があったことがうかがえる。

市内では水田跡は発見されていないが、石包丁が多く出土していることから、この時期に水田が存在していたことを裏付けている。また、鉄器や青銅器、ガラス・碧玉製の装飾品もこの頃から普及する。墓は穴を掘って木棺を埋葬した土壌墓や土器を使用した土器棺墓が多く確認されている。ただ、岡山県南部で見られるいわゆる王墓は、美作では確認されていない。

4) 古墳時代

3 世紀後半頃から、近畿地方では大きな墳丘に豊富な副葬品を持つ古墳が築造され始める。前方後円墳に代表される古墳は、その地域の首長の墓であるとされ、古墳の規模、副葬品等は中央との関係を表すものといわれている。市内では、4 世紀の初め頃に県史跡日上天王山古墳や少し遅れて市内最大規模の史跡美和山 1 号墳（約 80m）等が造られた。こ



美和山 1 号墳（国史跡）

のような首長墳とされる古墳の分布をみると、河川流域、丘陵や平野などを単位に地域ごとに築造されていることがわかる。5 世紀終わりごろからは直径 10m ～ 20m 程度の円墳が造られるようになり、これらの古墳には被葬者が主に木棺直葬で埋葬されている。6 世紀後半からは、追葬が可能となる横穴式石室が一般的な埋葬施設となり、そこには陶棺といわれる焼き物の棺が収められた。この陶棺は全国で約 700 例が確認されているが、その約半数が美作地域からの出土であり、このころの津山を含む美作地域の特徴となっている。

県史跡大蔵池南製鉄遺跡では、6 世紀後半の製鉄炉跡が確認されており、このころから製鉄が始まったと考えられる。ただ、これに先立ち鉄製品は、弥生時代中期末の県史跡沼遺跡から出土しており、また、5 世紀中頃の西吉田北 1 号墳や 5 世紀末の長畝山 2 号墳には、成分分析によって大陸からもたらされた鍛冶具が副葬されており、大陸もしくは他地域との交流を示すものである。

コラム

みまさか
美作は吉備の国か？

現在一般に岡山県全域（備前・備中・美作）と広島県東部（備後）とを合わせて「吉備国」と呼ばれることが多く、『桃太郎伝説』の生まれたまち おかやま～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～』として日本遺産にも認定されている。また、美作国自体が和銅6（713）年に備前国から分国されて成立していることも周知の事実である。

特に、日本遺産ストーリー構成文化財になっている特殊器台は、吉備文化の独自性を象徴する考古資料で、弥生時代後期に吉備で葬送の祭りに使用された土器として知られている。温羅伝説ゆかりの史跡^{たてつき}楯築遺跡や^{こいくいじんじや}鯉喰神社遺跡でも出土しているほか、奈良県の箸墓古墳でも出土が知られており、円筒埴輪の祖型ともされる。この特殊器台が出土するエリアを以て一般に「吉備国」として認識される遺物である。

一方津山市においては、墳墓遺跡から僅かに特殊器台片の出土が知られているものの、特殊器台が成立した弥生時代後期後半の日常の土器様相を見ると、吉備の中核部である岡山県南部、瀬戸内沿岸地域とは大きく異なる様相を示していることも広く知られている。

一般的には「元々あった『巨大な吉備国』から美作が分割された」というイメージだが、実際には「吉備国縁辺部は元々独自の文化・交流圏を持っていたが、弥生時代後期後半から古墳時代にかけて吉備国中核部の力が強大になった時期には一時的に吉備国に組み込まれた」と理解するほうが、実態に即しているようである。



県重要文化財中山遺跡出土特殊器台（真庭市）真庭市教育委員会提供

（2）古代

古代とは、奈良時代から平安時代までのおよそ8世紀から12世紀までの期間が相当する。古墳時代は、律令制の成立とともに終焉を迎えた。和銅6（713）年には、備前国の6郡を割いて新しく美作国が設置された。美作国の設置については、この地が備前南部とは異なる歴史と文化をはぐくんできたことが、その要因の一つであると考えられている。この美作国は、国の等級で大国に次ぐ上国と



美作国分寺跡（国史跡）

され、生産物等が豊富な国であったことがわかる。木簡などの資料から特産品は、米、黒葛、茜、大豆、絹、鉄、胡麻油、鹿皮、猪油等であった。これらは、官道である美作道を通して都に運ばれた。

美作国の中心である国府は、総社地内の平坦な高台に位置していた。県内の旧国（備前・備中・美作）のうち政庁の建物配置などがわかっているのは、美作国だけである。また、国分寺地内には、国分寺・国分尼寺が置かれ、史跡美作国分寺跡については、調査により伽藍配置が明らかになっている。ここで出土した瓦の文様は平城宮第二次朝堂院で使われたものに非常によく似ており、当時の人や物の交流を物語るものとなっている。

なお、現在、史跡美作国分寺跡は将来にわたる保存・活用のため公有化事業を行っている。

コラム

古代官道と高速道路

岡山県内では 1970 年代前半、中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が文字通り「突貫作業」で実施された。調査担当者の肉体的、物理的限界の中、調査報告書は遺構の実測図と最低限の遺物の情報に限られるものが多く、当時の調査員の苦労が偲ばれる。

ところで、中国縦貫自動車道は津山市内でも数多くの重要な遺跡の調査をもたらした。中でも美作国府跡、宮尾遺跡という古代の役所関連の遺跡が注目され、同様に市外ではあるが、隣町の勝央町においては平遺跡、美作市においては高本遺跡と、いずれも高速道路建設に先立つ調査で古代役所関連の遺跡が発見されている。このように高速道路の建設に先立つ調査においてはかなりの頻度で古代役所関連の遺跡が調査されている。これは全国的な傾向でもあり、なぜそのようなことになるのだろうか。

古代の道は律令制下の中央集権的な体制を支えるために、中央と地方の間をなるべく最短距離で結ぶことをその原則として作られている。そのため官道は自然地形を無視してでもより直線に近いルートを設定して、都と地方の役所をつなぐように建設されたと考えられている。

古代官道の「目的地により早く到達するために最短距離をとるルート設定や、沿線地域の利便性をあまり考慮しない道路」という性格は、実は現代の高速道路のルート設定に非常に近い。同じような原理で道路が設定されているために、結果として現在の高速道路は、古代の役所関連の遺跡をトレースするように建設されていると考えられる。

(3) 中世

鎌倉時代になると、国内の治安を監督する守護が派遣され、その守護が居住しその政治的権限の拡大とともに政庁としての機能を併せ持つようになった守護所は、神戸地内の史跡院庄

やかたあと
館跡（児島高德伝説地）であると考えられており、現在も保存されている。

室町時代以降、赤松氏と山名氏の争いにみられるように、武家勢力が頻繁に美作に進出してくるようになり、いわゆる戦国時代になると、美作の支配をめぐり尼子氏、浦上氏、毛利氏、宇喜多氏との戦い等近隣の戦国大名が多くの戦いを繰り広げた。そのため、市内には、県史跡^{いわ や じょう}岩屋城跡や同じく県史跡^{やはす}矢筈城跡（高山城跡）等このころの山城跡が多く存在する。



史跡院庄館跡（児島高德伝説地）

一方でこの頃、古代から続く鉄生産は低調になりつつあったが、開発の進展に伴い田畑からの収穫は増加していったようである。加えて森林資源は、中世を通じて京都等へ供給を行っていた。木材については、畿内の大寺社や邸宅の建築資材として重要視されており、このころの記録では、^{あおやぎのしょう}青柳庄（阿波、加茂町青柳付近）が、^{ほんこくじ}本圀寺や下賀茂神社（京都）、三井寺（滋賀）に木材を提供していることがわかっている。その木材は、河川を利用して都等へ運ばれており、^{ひ え さんのう り しょう き}「日吉山王利生記」や^{そば お えん ぎ}「蕎尾縁起」によると、木材は大雨が降り川の水量が増えたときに流したとあり、吉井川等を筏で下り、瀬戸内海で船に積み替えて都へ運んだとされる。市内には筏を組んだ場所を示すとされる^{いかだ ば}「筏場」という地名が残っている（加茂町河井）。

市内を含む美作地方には石で造られた^{ほうきょういんとう}宝篋印塔⁽²⁷⁾や五輪塔等が多く残っている。これらの形は、美作東部では播磨、西部のものは伯耆や出雲の特徴を備えており、この頃の美作地方は、多様な文化が交わる場所であったことがわかる。

（４）近世

慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いの後、^{こ ばやかわひであき}小早川秀秋が岡山城を拠点として備前・美作の支配を行うが、慶長7（1602）年の彼の死により、翌年の慶長8（1603）年、森忠政が美作一国の18万6,500石の領地を与えられ、津山城と城下町の建設に着手する。院庄が手ぜまとなったため、城地には吉井川と宮川の合流点の近くの鶴山を選び、その当時の鶴山にあった、^{つるやまはちまん}鶴山八幡宮や妙王院等を移転させ、この鶴山を津山と改め築城に着手した。石垣に使われた石材は、吉井川の南側一帯や下流の金屋地区より切り出されている。天守は5層で石垣からの高さは22m

(27) 宝篋印陀羅尼を収めた塔。のちに供養塔や墓碑塔として建てられた。

を測る。本丸には櫓 31 棟、門 15 棟を連ね内側には御殿を配していた。二の丸、三の丸にもあわせて櫓 29 棟、門 18 棟が並んでいた。武家諸法度により、城の新築が禁じられたため、元和 2（1616）年に未完成のまま築城を終了した。なお、平成 17（2005）年には、備中櫓の復元を行っている。



津山城跡（国史跡）

また、堀には東から宮川門、京橋門、二階町門、田町門、作事門、北門と 6 か所の門が

設けられ、そのうち出雲街道に面した京橋門が大手口とされ、この場所は市史跡津山城外濠跡として、津山城外周遺構が確認できる場所として公園整備がなされている。

城下町は、津山城を中心として吉井川と宮川を堀のように利用し、東西に細長く形作られた。最終的に現在の東新町から安岡町の範囲まで広がったのは、建設から 50 年以上たった 17 世紀後半であった。城下町には、職人が移り住んだ職人町である桶屋町、鍛冶町、鉄砲町、吹屋町等は職名がそのまま町名となり、現在でもその名を残す。町の東西には寺町を配し、現在も西寺町が町名として残っている。現在東の寺町に 7 寺、西の寺町に 15 寺が残る。

山陽道と山陰道に挟まれた美作国にはその両方を結ぶ道をはじめ各地に通じる道が多くあり、人々の生活や物流だけでなく文化を支える重要な役割を担っていた。その中でも市内を横断し、姫路と松江を結ぶ出雲街道は、五街道に次ぐ重要な道とされ宿場を設ける等の整備が行われ、市内では、津山と坪井に宿場がおかれた。

河川を利用した交通を見てみると、船底が浅く平らなことが特徴の高瀬舟は、水深の浅い場所でも運行することができるため、主に川で荷物を運ぶために利用されていた。この時代、一度に多くの荷物を運ぶことができる水運が荷物を運ぶ主役となっていた。市内では船頭町が高瀬舟の発着場として、年貢米や特産品を運び、海産物や生活必需品等が運ばれてきた。江戸時代初めの豪商角倉了以は、吉井川の高瀬舟をヒントに、大井川、富士川、天竜川等の水路を開いた。

この時代美作国には、ろくろを使って木製品を作る木地師が約 100 戸～ 200 戸いたとされ、市北部の山間部でも作業をしていた。明治以降は木製品の需要が減少したが、木地師の技術は現在も受け継がれている。また、加茂地域等では、商人や鉱山経営者によってたたらが経営されていた。たたらで必要な砂鉄を採取する際に大規模に山を切り崩して鉄穴流しをしたため、山の形が変わってしまった場所もあり、現在でもその様子が確認できる。

美作地域では、洋学（西洋の学術）を学んだ学者を多く輩出しており、江戸で活躍をした宇田川家、^{がわ みつくり}箕作家や美作地域で活躍をした洋学者が多かった。

津山藩に仕えた医師の宇田川玄随は、「西説内科撰要」で日本に西洋の内科を紹介した。2代目の玄真は、「大腸・小腸」等の医学用語を整えた。3代目の^{ようあん}榕菴は、日本最初の化学書「^{せい み かい}舎密開宗」等を出版し、「酸素」や「窒素」といった言葉を作った。西新町で生まれた^{みつくりげん ぼ}箕作阮甫も津山藩に仕える医師で、彼が書いたり、訳した書籍は160冊以上ある。また、アメリカやロシアとの外交交渉の場でも活躍をした。このように、津山からは多くの優れた学者を輩出し、後の明治以降の日本の発展に大きく寄与した。

宇田川家や箕作家は江戸で活躍をしたが、美作地域で活躍した在村医も多くいた。天然痘を予防する「種痘」が日本に伝わると、彼らはその普及に努め、また、明治初めには、津山藩に仕えた^{く はらこうさい}久原洪哉たちが藩主夫人の乳がんの手術を行った。このような彼らの活躍が地域の人々の命を支えていた。

コラム 津山藩の範囲

慶長8（1603）年、初代津山藩主森忠政は、美作一国18万6,500石の国持大名として、津山にやってきた。その領地はまさに岡山県北部、旧美作国全域であった。

森家4代の間は津山藩の領地は基本的に変化がなかったが、森家転封後入封した結城秀康を祖とする越前松平家の松平宣富は10万石であった。この時のエリアは概ね現津山市、鏡野町、真庭市である。

その後、廃藩置県まで松平氏が治めるところとなった。享保6（1721）年に家督を継いだ嗣子浅五郎が享保11（1726）年に嗣子無いまま11歳で夭折したが、改易は免れ、宣富の弟で白河新田藩主松平知清の三男の長熙を迎え家督を相続させた。ただしこの際に知行は半減の5万石となった。この時が津山藩の領地が最小になった時期であり、概ね現津山市の範囲まで狭くなっている。

こののち8代藩主に11代將軍家斉の十四男斉民を養子に迎えることにより、石高を10万石に復帰させることに成功した。この時は概ね元の10万石のエリアに戻るのであるが、領内に飛地が数多くあったため、美作近隣では十分領地が確保できず、讃岐の小豆島に津山藩領の飛地があったことは広く知られている。

以上のように一口に「津山藩」といっても、現津山市の市民にとってはあまり関係ないかもしれないが、周辺の住民から見れば、津山藩であった時期、なかった時期があり、「津山藩」のとりえ方も複雑である。

(5) 近代以降

明治4(1871)年に廃藩置県により、津山県がおかれ、すぐ後には、美作地域全体が北条県となった。そして明治9(1876)年に岡山県(備前と備中)と合併し、ほぼ現在の岡山県となった。この時期、我が国は近代国家建設に向けて、殖産興業を推し進め、津山においても、産業の育成や交通網の整備等が進められた。



岡山県立津山高等学校(旧岡山県津山中学校)本館

特に美作地域では、当時の輸出の中心が生糸であったことから、養蚕が奨励された。長野、群馬といった先進地から養蚕や製糸の技術を取り入れ、岡山県も山下で勸業試験場と養蚕製糸所をつくり技術の習得を行った。当初、製糸は人手を要する座繰製糸であったが、やがて器械製糸となり、津山にも製糸会社が設立された。浮田^{うきまち}卯佐吉・佐平^{さへい}親子が創業した浮田製糸会社もその一つである。

この時期、吉井川の高瀬舟も大いに栄え、津山と西大寺(現岡山市東区)との間には飛船と呼ばれる客船が運行され、80人乗り、100人乗りの船まで現れた。しかし、明治31(1898)年には中国鉄道の津山(現津山口駅)から岡山までの開通により、高瀬舟は衰退していく。また、古代より行われていた、たたら製鉄は西洋の製鉄技術の導入とともに、大正末期に、現在の鏡野町上斎原^{えいかなやまてつざん}の栄金山鉄山の閉山をもって途絶えた。

この時期の文化財には、明治33(1900)年に建築された重要文化財岡山県立津山高等学校(旧岡山県津山中学校)本館があり、明治時代の旧制中学校建築の数少ない例で、学校建築史上重要であり、現在も学校施設として利用されている。

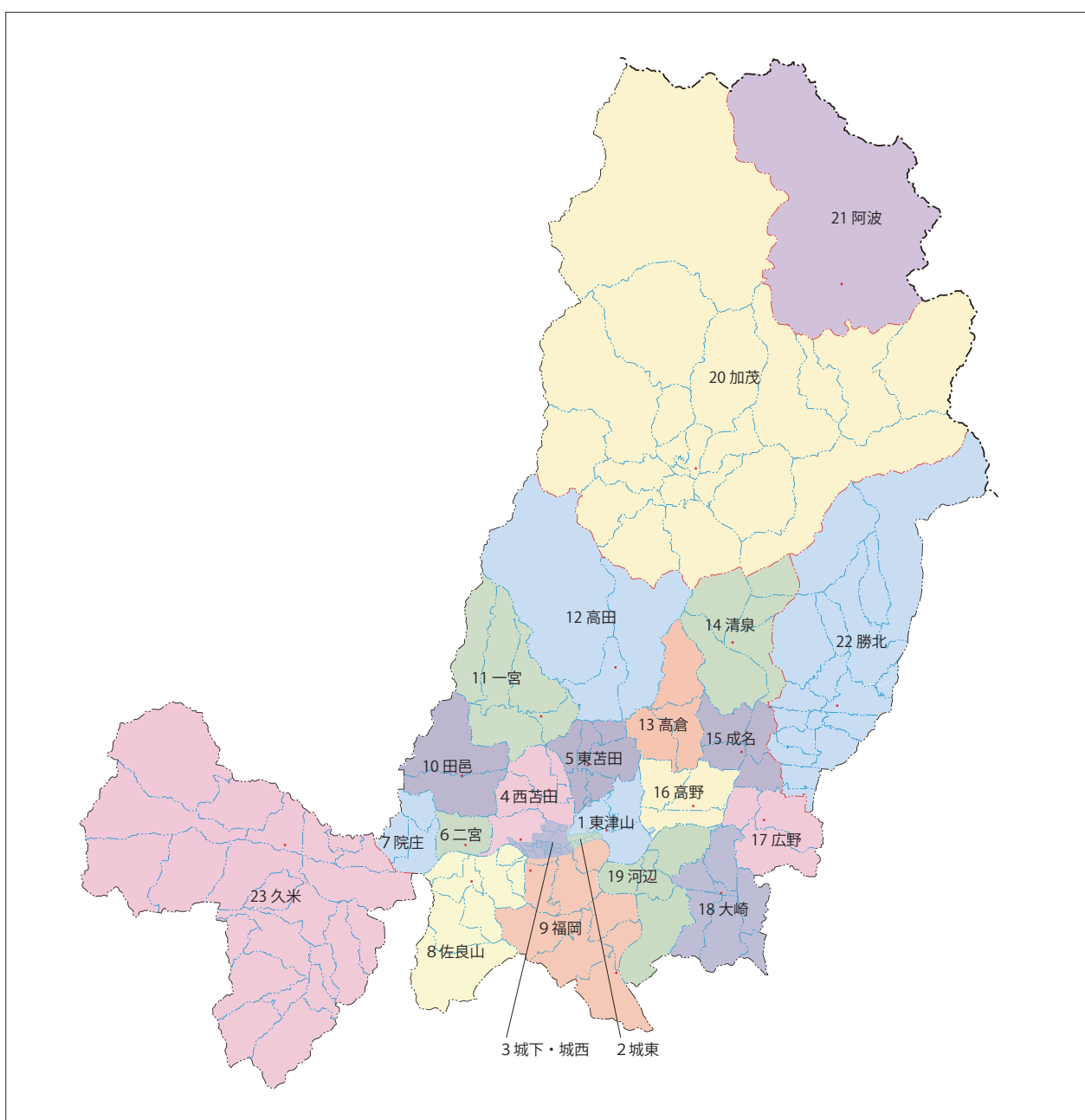
また、この頃の国家や社会の近代化にかかわる産業・交通・土木に係る建造物については、「近代化遺産」とよばれており、市内には特に鉄道に関する遺産を中心に、その多くが残り、また利用され続けている。

近代化が進む一方で、昭和に入ると世界恐慌による影響や、昭和6(1931)年の満州事変に始まる戦争の拡大が人々の生活にも影響を及ぼしていく。農村では農村不況の打開と食糧増産という国策から、県下第2位の貯水量の塩出池(津山市市場)や昭和池(津山市東田辺)等の灌漑用ため池が造られた。昭和18(1943)年には郡是製糸津山工場が航空機の部品を製作する工場に替わり、当時の名所であった二宮松原の松並木も伐採され供出された。結果として津山市

は空襲の被害を受けることはなかったが、空襲から街を守るため公会堂や商工会議所等 42 棟が壊されている。この時期の代表的な建造物としては、登録有形文化財旧津山市庁舎（現津山郷土博物館）が建設され、昭和 57（1982）年まで市庁舎として利用されていた。昭和 20（1945）年の終戦、戦後の復興から高度経済成長へと時代は移り、昭和 40（1965）年、建築家の川島甲士により設計された津山文化センターは、社寺建築に見られる斗拱構造が特徴のモダニズム建築であり、現在に至るまで市民に親しまれ、使い続けられている。

04 地域区分

この計画で用いる地域区分は、旧津山市内においては原則的に明治 22 (1889) 年当時の町村の区域で設定した。ただし、現在の生活実態にそぐわない地区については、小学校区を基本とした。旧加茂町、阿波村、勝北町および久米町については、それぞれ平成 17 (2005) 年の合併前の自治体区域で設定をした。これにより、概ね各地区に公民館が位置し、また多くの地区で、小学校区とも一致することとなった。



地区割り図 (23 区)

地域区分一覧表

	地区名	字 名
1	東津山	川崎・野介代・林田
2	城 東	東新町・西新町・中之町・勝間田町・林田町・橋本町・上之町
3	城下・城西	材木町・伏見町・京町・河原町・船頭町・小性町・吹屋町・新魚町・堺町・二階町・元魚町・新職人町・戸川町・本町2丁目・本町3丁目・美濃町・桶屋町・下紺屋町・鍛冶町・坪井町・福渡町・細工町・上紺屋町・宮脇町・南新座・山下・北町・椿高下・城代町・田町・大手町・西寺町・鉄砲町・新茅町・西今町・茅町・安岡町
4	西苫田	小田中・上河原・北園町・山北・総社・小原
5	東苫田	志戸部・勝部・靱保・紫保井・大田・沼・弥生町
6	二 宮	二宮
7	院 庄	院庄・神戸・戸島
8	佐良山	福田・高尾・皿・平福・中島・一方・津山口・井口
9	福 岡	大谷・昭和町1丁目・昭和町2丁目・南町1丁目・横山・八出・小桁・金屋・押淵・荒神山・種
10	田 邑	上田邑・下田邑
11	一 宮	一宮・東一宮・東田辺・西田辺・山方
12	高 田	下横野・大篠・上横野
13	高 倉	上高倉・下高倉東・下高倉西
14	清 泉	吉見・綾部・堀坂・妙原・三浦
15	成 名	草加部・野村・近長・檜
16	高 野	押入・高野山西・高野本郷
17	広 野	河面・福井・田熊
18	大 崎	金井・中原・福力・新田・西吉田・池ヶ原・堂尾
19	河 辺	国分寺・日上・瓜生原・河辺
20	加 茂	加茂町物見・加茂町河井・加茂町山下・加茂町知和・加茂町青柳・加茂町塔中・加茂町小中原・加茂町齋野谷・加茂町戸賀・加茂町黒木・加茂町倉見・加茂町宇野・加茂町原口・加茂町行重・加茂町櫓井・加茂町百々・加茂町中原・加茂町成安・加茂町下津川・加茂町公郷・加茂町桑原・加茂町小淵
21	阿 波	阿波
22	勝 北	新野東・西上・西中・西下・新野山形・日本原・市場・大岩・大吉・奥津川・上村・中村・杉宮・坂上・原・安井・上野田・下野田
23	久 米	坪井上・坪井下・中北上・宮部上・宮部下・中北下・南方中・一色・神代・久米川南・領家・宮尾・くめ・戸脇・桑下・桑上・福田下・八社・油木下・油木上・油木北・里公文・里公文上